休暇

谷山結子

父方の祖母が亡くなった。
と聞いて真っ先に思ったのは、仕事の休みが取れるだろうかということだった。
タイミングが最悪。
亜沙子（あさこ）は顔をしかめた。三か月前に転職したばかりで、試用期間が明けたのはつい先週のことである。
仕事中に母から電話がかかってきて、何事かと思ってトイレに行くふりをして席を立ち、別のフロアに移動して折り返しの電話をかけると、長く入院していた父方の祖母が今朝亡くなったという知らせだった。明日が通夜で、あさってが葬儀。喪主を務める父は、会社を早退して一足先に新幹線で向かっている。と、そこまでは淀みなく話した母が、突然、歯切れが悪くなった。
「手短にお願い。仕事に戻らないと」
ぞんざいな態度は取りたくないが、こちらの状況も分かってほしい。
数秒の沈黙のあと、母が意を決したように言った。
「あさってのお葬式、あなたたち孫三人で、お花代を出そうとは思わない？」
「はい？」
全く予想もしていない方向からの話だった。
「葬儀場の供花に〝孫一同〟という札を出したいと考えているの」
「……」
母の中ではすでに決定事項のようだ。
給料日までの日数と、予算の残りを頭の中ですばやく計算する。一か月の予算を決めて、その範囲内で生活しなければ一人暮らしは破綻する。「祖母の供花代」なんて想定外もいいところだ。
「いくら？」
祖母の孫は全部で三人。つまり、亜沙子と兄と弟である。
「ひとり一万円でどうかな」
「一万円？」
思わず声が裏返った。一か月分の食費と同額ではないか。
「それは、さすがに高くない？」
「そんなことない。普通の金額よ」
間髪入れず母が反応した。そして熱っぽく語り出す。こうなると止まらない。
「お葬式で〝孫一同〟って書かれているお花があるのって、すごくいいと思わない？　お孫さんに慕われる素敵なお祖母ちゃんだったんだなって、誰もが思うでしょ？　実際、お義母さんはその通りの人だったし。ほら、お義父さんのお葬式のときは寂しかったか

ら。あれほど人づき合いが活発だった人でも、九十まで生きると、お葬式に来る人もいなくなるってことを痛感したの。お義父さんでこれだと、お義母さんのときは、もっと寂しくなるだろうなって」
「うん」
祖父の葬式には親戚も参列者もそれなりに集まったと記憶しているが、反論すると話が長くなるので聞き流した。
「だから、お花を贈るのは、いい考えだと思って。しかも、孫から。孫がいるって、それだけで幸せなことだし」
「そうだね」
離席して五分以上、経過していた。
「あ、お義母さんが元気なうちからそんなことを考えていたなんて不謹慎だとか、そんなふうに思われるのは」
「思ってない。――今、送ったから」
「え？」
「スマホ確認して。送金したから」
「え、うそ。あら、ほんと。入金あり、だって。一万円。こういうの、ふだん使わないから実感が湧かないわ。明日、一緒にお通夜に行くんだし、そのとき現金で渡してもらうので良かったのに。でも、ありがとう」
じゃあね、と話を終わらせて通話を切り、亜沙子はダッシュで来た道を戻った。

通夜の弔問客が途絶えたあと、〝寝ずの番〟を誰がするのかという話になり、亜沙子は自ら手をあげた。その場で自分だけが突出して若く、高齢者に徹夜させるのも悪いと思っただけなのだが、おばあちゃん思いの孫だと口々に賞賛され、少々白けた気分になった。
親戚たちがぞろぞろとホテルに引き上げて行くのをぼんやり突っ立って眺めていると、葬儀会館の係員がそばに来て、この地域（あたり）でも最近は半通夜ですませる場合が多くございます、とささやいた。
両親が祖母の家に帰って行くと、斎場に一人きりになった。急に心細くなる。係員の姿も見えない。祭壇に置いてある棺の小窓が、開いたままになっていた。夜通し開けておくのだろうか。近づいてそっと中をのぞく。祖母の顔に自分の影が重なった。
おばあちゃん、と心の中で呼びかけてみる。
久しぶり。亜沙子です。三十二歳になりました――
そこから先が続かない。特に言うことがなかった。
最後に会ったのは何年前だろう。
少なくともコロナが始まってからは会いに来ていない。
ごめん、と今度は声に出してみた。おばあちゃんのまわりにいるのは薄情な人間ばかりだ。自分もそうだし、他にも三人いる。一人は言うまでもなく兄。初孫として祖母にさんざんかわいがってもらったくせに、この場にいない。あとの二人は亜沙子の伯母、

すなわち父の姉たちだ。
海外にいる父の姉二人は帰ってこない。父のスマホに送られてきた「あとはよろしく」「一任します」「いかようにも」「頼もしい弟」「喪主、がんばってね」などのコメントに母は憤慨した。そんなものを母に見せる父も父だが。
「あとはよろしくって言うけどさ、先に何かしてくれたことあったっけ」
斎場の最前列に親子三人並んで座っている間も、母は文句を言っていた。
「お義母さんが入院した時も、危篤の時も、それから亡くなった今も、一度も帰国しないで、葬儀まで全部こっちに押しつけて」
父は何も言わず、呪詛のような母の言葉をおとなしく聞いていた。

棺のそばを離れ、祭壇を俯瞰する。祭壇の横に供花スタンドが何基か設置されている中で、〝孫一同〟という札のかかった一基に目がいく。
結局、他の二人はお金を出したのだろうか。
弟は半年前に二人目の子が生まれたばかりで、家計の余裕はないはずだ。
兄は論外だ。三十五歳にもなって、職歴なしの引きこもりときている。百円すら自腹では払えないだろう。何が「孫三人で」だ。兄の分は母が負担したに決まっている。
両親は、娘は安泰だと思っているかもしれないが、一人暮らしをしているからといって、経済的に安定しているとは限らない。生活はいつだって苦しい。本当なら実家住まいをして支出を抑えたいところだ。
少しでも収入を増やそうと転職したのが三か月前。試用期間中も連日残業し、必死に仕事を覚え、さあこれからというタイミングで今回の忌引き休暇である。きのう上司に恐る恐る相談したら、予想どおり嫌な顔をされた。休暇の申請は通ったが、先が思いやられる。
祭壇の真ん中に掲げられた祖母の遺影を改めて見つめる。そうしたところで特に何も感じないのが悲しい。やっぱり薄情な孫である。母の方が祖母への思いは深いだろう。
母がなぜ義理の姉たちにあれほど怒ったのか、最初は分からなかったが、母は祖母のために怒ったのだ。
祖父が亡くなって気落ちしていた祖母に電話をかけては話し相手になり、祖母が入院してからも、さまざまな手続きを代行していた母には、伯母たちに対して怒る権利がある。だから父も黙って聞いていたのだ。
自分はどうなのか、と亜沙子はふと思った。兄に対する怒りの感情はどこから来るのか。母のように真っ当な理由があるのか。そう考えると、今朝は少々、大人げなかったかもしれない。
今朝、こちらに向かう新幹線の中で、兄が近所のコンビニには一人で行けると母から聞いて、亜沙子はたちまち頭に血がのぼってしまったのだ。
「だったら一人で留守番する間、食べることぐらい自分でさせればいいのに」
新幹線の指定座席に座るやいなや、寝る態勢に入った母に、亜沙子は噛みついた。
「毎日コンビニ弁当じゃ飽きるし、栄養も偏るし、かわいそうでしょ」

母は今朝、早起きして、兄のために数日分の食事を作り置きして家を出たという。「かわいそう？　どこが？　二、三日やそこらコンビニ食でも死にゃしないし。っていうか、今どき、コンビニの方がそこらのスーパーより品揃えが充実してるし。三食コンビニなんて逆に贅沢だってば。ちょっと過保護すぎやしない？」

母は無言で背中を向けて動かなくなった。新幹線から在来線に乗り継ぎ、半日かけて葬儀会館に到着しても、亜沙子の怒りは収まらなかった。自分の方がよっぽど貧しい食生活ではないか。それなのに、お供えの花代はしっかり徴収されて……と、今、思い返しても、やっぱり腹が立つ。感情のコントロールが難しい。

棺の窓から祖母の顔をのぞく。さっきよりは怖くない。手を差し入れて、祖母の頬にそっと触れる。冷たくて硬い。目に焼き付けるように祖母の顔をじっと見て、それから窓の蓋を閉じ、日付が変わる前に亜沙子は葬儀会館をあとにした。

翌朝早く、まだ寝ている両親を起こさないよう静かに祖母宅を出発し、葬儀会館に戻った。高齢の男性が、亜沙子の顔を見るなり「おお、ご苦労さん」と破顔した。「ひと晩、大変だったでしょうが」と労われ、「いえ、大丈夫です。少し寝不足ですが」などと適当に返しておく。

葬儀と告別式のあと、出棺まで時間が空くので控室で待つことになった。長机とパイプ椅子が並べられた殺風景な控室の隅に、お茶のセットがあった。急須の蓋をつまみ上げると、中にパックの茶葉が入っていて、ポットの湯を注ぐだけでいいようになっている。湯のみに緑茶をつぎ分け、高齢の親戚たちに配って回る。それだけで過剰なほど感謝される。ここに弟家族がいれば、雰囲気は一変しただろうけれど。宅配会社のドライバーをしている弟は仕事を休めず、弟の妻も、三歳と新生児の子がいては身動きが取れない。

それにしても、と亜沙子は感慨深い気持ちになる。三十歳で妻と子どもが二人。なんと順調な、上出来の人生だろうか。ちゃらんぽらんな性格で学校の成績もすこぶる悪く、三人きょうだいの中で最も将来を憂慮された末っ子が、今やうちの家族のホープである。今後もつつがない人生を歩んでほしいと願うばかりだ。

お茶をすすり、ほうっとため息をつく。こういう場にいるせいか、どうも思考の向きが家族やら血縁やらになってしまう。早く帰りたい。帰ったら、散らかり放題のワンルームマンションを徹底的に掃除して、居心地の良い空間に生まれ変わらせてやろうと心に誓った。

祖母の妹がそばに立っていた。気配が全くなかったのでびっくりする。「ありがとうね、お花」と言いながら、もともと曲がっている腰をさらに屈めて頭を下げられ、亜沙子は慌てて立ち上がった。その拍子に何か硬い物に足の先がぶつかる。大きな紙袋が床に置かれていた。紙袋の中に入っているのは鞄？　「すみません、蹴っちゃって」

紙袋の中身が無事かどうか気にする素振りをすると、「いいから、いいから」と祖母の妹は感じよく手を振った。

少し離れて座っている祖母の弟も、「姉さんは幸せ者だわ」と声をかけてきた。いえ、

そんな。口ごもっているうちに、白い百合の花がふんだんにあしらわれた供花と、その真ん中の〝孫一同〟の札がパパパパと頭に浮かぶ。母の言ったとおりだ。こんなにも喜んでくれる。こっちまで嬉しくなるほどに。温かい気持ちになりかけたが、「お兄さんは元気にしてなさるかね」というひと言に冷めてしまった。

ここ数年、兄とは顔すら合わせていない。今年の正月に実家に帰ったときも、兄は自室から出てこなかった。両親とは毎日食事を共にしているというから、どうやら避けられているらしい。階段の下から兄の部屋に向かって「亜沙子も来てるし」と声をかける母に、別に会わなくてもいいけど、と言ったら、「そんなことを言うものじゃない」と父にたしなめられた。あの穏やかな父が怒っていた。

湯のみのお茶を一気に飲み干して立ち上がった。気分転換が必要だ。お手洗いに行ってきます、と断って部屋を出た。

受付の係員に聞くと、火葬場の進行が押していて、出棺時間が遅れるということだった。周辺を散歩してこようと葬儀会館を出たとき、後ろから「姉ちゃん」と声をかけられた。振り向くと、兄と弟が並んで立っていた。

「出棺に間に合って良かったよ」

弟が笑顔で近づいてくる。

「あんた、仕事はどうしたの？」

「休みの先輩に代わってもらった。前に先輩の奥さんが出産するとき、俺が代わりに休日出勤したから、おあいこだって言ってくれて」

「奥さんと子どもたちは？」

「向こうのお義母さんが手伝いに来てくれた」

「ふうん」

立派な社会人になったものだ。前に会ったときより体がたくましくなって、顔の血色もいい。全身から生気がみなぎっている。亜沙子は心の底でうめいた。兄弟の対比がすごい。

「一緒に来たの？」

弟の肩越しに、少し離れて突っ立っている兄の方をうかがいながら、亜沙子は小声でささやいた。兄は重心が定まらず、痩せているわけでもないのに、風が吹けば倒れそうだ。

「うん。今朝、お袋に電話して葬式に行けることになったって伝えたら、ついでに実家に寄って、兄貴も一緒に行こうって誘ってみてほしいって頼まれてさ」

弟も、実家からそう遠くない所に住んでいる。

「それであの人、来るって言ったの？」

「おう。現に、来てるじゃん」

二人して兄を見ると、兄もこちらを向いた。ただし、視線は合わない。

「姉ちゃん、今からどっか行くの？」

出棺までの暇つぶしに辺りを散歩するつもりだと言うと、「だったら、俺らも一緒に行くわ。すぐそこにファミレスがあったし。もう腹が減って」

おばあちゃんに挨拶してきたら、と言ってみたが、あとでも会えるし、と予想どおりの答えだ。うちの家系はみんなあっさりしている。
「でも、あの人は、おばあちゃんに早く会いたいんじゃない？　聞いてみてよ」
「自分で聞けよ。俺はファミレスに行く」
そう宣言すると弟はスタスタと歩き出した。兄は不意打ちを食らったように後ろ側に足を一歩踏み出し、それから体勢を立て直して歩き出した。仕方なく亜沙子もついていく。
ファミレスまで五分もかからなかった。窓際の広いテーブルに案内される。きょうだい三人で向かい合う。目の前に兄と弟。ものすごくレアな光景だ。脳内の情報処理が追いつかない。
「ここは俺のおごり。兄貴も姉ちゃんも、好きなもん頼んで」
兄は渡されたメニュー表をぼんやり眺めるばかりで一言も発しない。しびれを切らした弟がステーキ定食を二人前、注文した。亜沙子はコーヒーゼリーパフェにした。
「姉ちゃん、昔から好きだったよな、コーヒーゼリー」
弟がせっかく話を振ってくれているのに、ああ、うん、とうなずくだけで、うまく反応できない。兄はもちろんいっさい喋らないので、三人とも無言になる。亜沙子は食べることに集中しているふりをした。
兄がトイレに立ったタイミングで、亜沙子は財布を取り出し、自分の食べた分の代金をテーブルに置いた。
「いいって、別に」
「おごってもらう理由、ないもの」
「相変わらずだなあ、姉ちゃんって」
その言い方にカチンときた。とたんにエンジンがかかる。
「だいたい何よ。あんた、キャラ変わってんじゃない。前からそんなだっけ？」
「何が」
「今まで実家に寄りつかなかったくせに、今日は遠路はるばる兄弟で一緒に来たりして、急にどうしたのよ」
「そりゃ、ばあちゃんの葬式だもん。まあ兄貴と一緒に来たのは、なりゆきだけど。お袋の頼み方が、なんか必死って感じだったし。よっぽど兄貴に来てほしいんだなって思ってさ」
母の口ぶりが目に浮かぶようだ。
「それに実家には、俺ら家族四人でちょくちょく帰ってるよ。行こうと思えばすぐ行ける距離だし、孫の顔、見せてやりたいしさ」
「訂正。あんたが実家によく帰ってるのは私も知ってる。あの人と関わることはなかったでしょって言いたかったの」
「そりゃそうだよ。兄貴、自分の部屋から出てこないもん。二階まで呼びに行っても部屋の鍵がかかってて、開けてくれないしさ」
「あんた、部屋のドアを開けようとしたの。チャレンジャーだね」

驚いた。この弟がここまで兄を気にかけているとは。気にかけて、そのうえ関わろうとしている。そこが自分とは決定的に違う。すると弟が分かりきったことを言った。
「兄貴を避けているのは姉ちゃんの方だろ」
亜沙子は黙って窓の外を見た。横断歩道の向こうに、他の建物に遮られた葬儀会館の屋根の部分が見える。辺鄙なところだと内心バカにしていたが、地元の人にとっては、ここらあたりは町の中心地なのだ。
「新幹線で移動中、いろいろ聞いてみたんだ。長時間、兄貴と二人きりになるなんて、この先、二度とないかもしれないし」
「いろいろって？」
「なんで家から出ないの、とか」
「あんた、よくそんな、いきなり直球すぎる質問を」
「いきなりじゃないよ。その前にあれやこれや話しかけて、そこそこ反応もあって。意外に喋るよ、兄貴。で、時間はたっぷりあるし、ちょっと踏み込んだ質問をしても、いけるかなって。俺が一番、聞きたかったことでもあるし」
そう言いながら、弟の視線はメニュー表に注がれている。まだ食べるつもりなのだ。
「で？」
「で、って？」
弟が目線を上げた。
「家から出ない理由よ」
焦らすのはやめてほしい。「何て言ったの、あの人」
「姉ちゃん、その〝あの人〟っていうの、止めたら？」
「うるさい。話をそらすな。質問に答えて」
「怖いんだって。外に出るのが」
「外に出るのが怖い？」
通りがかった店員を呼び止めてポテトフライを一つ、デザートプレートを三つ注文する弟を阻止しようとしたが遅かった。
「なんでデザートを三つも注文するのよ。私の分、キャンセルして」
「心配しなくても食べられるって。コーヒーゼリーなんてカロリーほぼゼロだろ」
「そんなことない。上にアイスクリーム、のってたし」
「姉ちゃんはもうちょっと太った方がいい。どんな食生活してんだよ」
頭がかっと熱くなる。「余計なお世話よ！」
亜沙子の剣幕に一瞬ひるんだ弟だったが、すぐに話題を変えた。
「兄貴って、それほど嫌な奴じゃないよ」
「誰もそんなこと言ってない」
「でも、明らかに避けてるじゃん？」
「あんただって今日のことを別にすれば、ふだんは関わりがないでしょ」
「俺、兄貴とラインしてるよ」
「うそ！　マジで？」

いつのまに？　だいたい兄がスマホを所持していることすら知らなかった。
「咲良（さくら）が生まれたとき、兄貴にもラインで写真送ったら、コメント返ってきたよ、ほら」
咲良というのは、昨年生まれた弟の下の娘だ。弟のスマホをのぞきこむ。
「スタンプの使い方、知ってるんだ……」
「姉ちゃん、兄貴のこと、何だと思ってるわけ？」
弟があきれたように言う。
「つまり、あんたたち、日常的にラインしてるってこと？」
「日常的ってほどではないけど」
「じゃあ、どれくらいの頻度？　月に一回？　三か月に一回？　咲良が生まれたのは半年前だよね。そのあともラインした？」
「そんなこと把握してないよ。そこ、こだわるところか？」
「兄弟でやりとりして、私だけ除け者？　私だって悩んでたのに」
亜沙子は両手で頭を押さえた。
「正月だって、二階から降りてこないし。避けられているのは私の方なのに、お父さんに怒られるのは私だし」
――そんなことを言うもんじゃない。父の落ち着いた声が耳元でよみがえる。
「あいつのせいで、実家に帰るのも、いちいち気をつかうんだから。本当は私だってもっと帰りたいのに」
「帰ればいいじゃん」
「だから、そういうわけにはいかないの。嫌われてるって言ったでしょ」
「それは誤解だよ」
「なんで言いきれるのよ」
「そりゃあ、だって……嫌いな奴と、こうして一緒に食事したりするか？」
「バカじゃないの、あんた」
兄がトイレから戻って来るのが見えたので、亜沙子は口をつぐんだ。

結局、兄について分かったことは一つもなかった。そもそも、あの弟から兄の情報を引き出そうと思うのが間違いだった。外に出るのが怖いだって？　そりゃそうだろう。長年、自宅に引きこもるくらいなのだから。
丘の上に建てられたコンクリート打ちっぱなしのおしゃれな火葬場は、まるで最先端の美術館か博物館のようだった。座り心地が抜群のソファに身をゆだねると、たちまち周りの喧騒が遠のく。ああ、やっぱり一人がくつろぐなあと実感する。好きな男と二人でいても、これほどリラックスすることはなかった。結婚は遠い。とてつもなく。
骨上げの時間になり、ソファから身を起こす。係員に先導されて親戚一同ぞろぞろとついていく。骨上げには順番があるらしく、故人との関係を確認され、父、母、兄、亜沙子、弟の順に一列に並ばされる。目の前に兄の背中があった。その肩のあたりをじっと見ていたことを自覚したのは、兄が急に振り向いたせいだった。
「な、な、何？」不覚にも、どもってしまった。兄は目を見開いたまま、無言でまっす

ぐこちらを見返してくる。先に目をそらしたのは亜沙子だった。
前にもこういうことがあった。しかも何度も。兄のあとに続いてお骨を拾い、それを骨壺に納めながら、今は祖母のことだけを考えようと努めた。

火葬場からの帰りは、父が骨壺を、兄が遺影写真を胸に抱えてハイヤーに乗り込み、亜沙子たちは後続のマイクロバスで葬儀会館に戻った。窓から外の景色に目を奪われた。風にそよぐ青々とした稲穂。子どものころ、伯母からもらった絵はがきの写真――どこかの国の大草原だった――を思い出した。下の伯母は若いころ、世界中を旅した。行く先々で、英語が好きだった亜沙子宛てに、手書きの英文を添えた絵はがきを送ってくれた。今は、イギリスはヨークの大学で経済学を教えている。彼女のように生きられたら幸せだった。

田んぼの向こうに森があり、山がある。低く連なる山々の稜線が金色に輝いている。もう少し日が傾けば、稲穂も金色に染まるだろう。マイクロバスの前を走るハイヤーが一足先に左折した際、ハイヤーの後部座席に座る兄の横顔がちらっと見えた。亜沙子は目を細めた。

亜沙子のぼんやり空想にふける癖は、小学校高学年の頃にはすでに出ていた。学校でも家でも思うようにいかないことが多すぎて、現実逃避が必要だったのだ。「何、見てんだよ」と兄によく言われた。食卓の席が向かい合わせで、たまたま目線がそっちを向いていただけで兄のことなんか見ていない。頭では別のことを考えていた。「誰がお前なんか見るか」「この自意識過剰が」と応戦しては、不毛な口論に発展した。

あれは、亜沙子が働き始めて、まだ実家にいたから、短大を卒業して二、三年経ったころ、つまり今から十年ほど前の話だ。兄が電車の中で暴れて警察に通報され、父が会社を早退して警察署まで迎えに行くということがあった。

当時、兄は二十五歳。就職活動がうまくいかず、定職には就いていなかったが、引きこもってはいなかった。その日はアルバイトの面接があり、朝から出かけたらしい。

電車に乗っていて、後ろに立った女が自分をにらみつけてきた。警察署で兄はそう話したそうだ。警察から父への説明によると、兄がいきなり若い女性に「こっちを見るな」と食ってかかり、言い返してきた女性に殴りかかった。周りの乗客らに制止されても暴れるため次の駅で降ろされ、駆けつけた駅員が警察に通報した。兄自身は、腕は振り上げたけれど相手の女性を殴るつもりなんてなかったし、他の乗客に押さえつけられた手首が痛くて振りほどこうとしただけだと主張している、とのことだった。

兄の言い分はおそらく真実だろう。たしかに情緒不安定で興奮しやすい一面はあるが、人を殴ったりするような人間ではない、というのが家族の一致した意見だった。それでも母は、若い女性に食ってかかるなんて恋愛がうまくいかない劣等感のせいかしら、と嘆いた。亜沙子の考えは違った。

その電車は、亜沙子も毎朝、通勤で使っている路線だった。車内の位置関係を父から聞いて、亜沙子はすぐにピンときた。その若い女性は、日焼けを防ぎたかったのだ。朝日がまともに射し込む東側の車窓に背を向けたところに兄の背中があった。兄は西側の

窓を向いて立っていた。人の気配を感じて振り返れば、そこに女性の顔。通常なら背中合わせに立つところを、なぜわざわざこっちを向くのか。至近距離でまともに目が合い、兄は戸惑っただろう。でも、相手からすれば言いがかりもいいところだ。日差しを避けようとしただけなのに。亜沙子だって毎朝そうしている。電車の中で日傘を差すわけにもいかないし。黙って聞いていた両親がそこで笑ったので、亜沙子はほっとした。

その話を兄にもしてほしいと両親に頼まれた。でも、兄には言わなかった。言えば何かが変わっていただろうか。

窓から見える景色が一変していた。道路すれすれに建物が立ち並ぶ。街中に戻ってきたのだ。信号待ちでバスが一旦停止したタイミングで亜沙子はすばやく立ち上がり、前方に移動した。隣の席に座り、その片耳からイヤホンを外してやると、弟が跳ねるように振り返った。亜沙子がにっこり笑いかけると、弟は不気味なものを見る目つきになった。おかまいなしに亜沙子は話し出す。弟が座り直して聞く態勢になったのに力を得て、話が止まらなくなった。警察沙汰の件は、弟は初耳だったようだ。当時、弟はすでに高校を卒業して家を出ていた。

「あの一件以来、アルバイトを探すのも辞めて、だんだん家から出なくなったのよね」

「うん」

「女の人が後ろから見ていた理由を私がちゃんと話していれば、家に引きこもることはなかったかもしれない」

「うん」

「そもそも他人の視線に敏感になったのも、私が原因かも。昔から、私の視線がうざいって、いつもキレてたから」

「うん」

「考え出したら気になって、さっきから眠れないのよ」

「今、真っ昼間だけど」

「この移動中に仮眠するつもりだったの。このところ残業続きで寝不足だから」

「やばいじゃん」

言い方に気持ちがこもっていない。

「どうしたらいいと思う？」

「何が」

「今からでも言うべきかな？」

「何を」

「分かんないけど、いろいろ」

「十年前の話を？」

「……まあ、そうだね」

「ふーん。よく分からんけど。言いたいんなら、言えば？」

「それだけ？」

「だって、その女の人がどういう理由で兄貴の方を向いていたかなんて、今さらどうでも良くない？　仮に姉ちゃんの推理が正しかったとして、だから何なのって感じ。そん

な細かい話、俺にされてもな」
「冷たいわね」
「だいたい、そんなささいなきっかけで引きこもったりする人間は、遅かれ早かれ引きこもりになるんだよ。姉ちゃんの兄貴に対する態度がどうかなんて関係ないよ」
「冷たいわね、あんたは」
恨めし気に、繰り返すしかできない。
「ほんと面倒くさい人間だよなあ、姉ちゃんも兄貴も。昔っからそうだったけど」
付き合いきれん、とつぶやいた弟はイヤホンを耳にねじ込んで目を閉じてしまった。
信号に引っかかってバスが停止した。信号をすり抜けたハイヤーが、どんどん離れていく。後方の席に戻ろうと亜沙子が立ち上がったとき、弟が目を開けた。
「言えばいいんじゃない？　気になるんだったら。兄貴と話すきっかけにもなるしさ」

火葬場から葬儀会館に戻って、併設の和食レストランで会食をした。今日中に納骨まで済ませることになっている。喪主を無事に務め上げた父は、肩の荷が下りたように穏やかな表情に戻っている。意外だったのは、親戚たちの輪の中に、兄も違和感なく参加していることだった。親戚たちが語る祖母の話を、控えめにうなずきながら聞いている。とても嬉しそうに。あれは語り手もさぞ熱が入るだろう。実際、兄のそばに次々と人が寄ってきている。
会食後、葬儀会館に隣接する納骨堂にみんなで向かった。祖父がすでにここに入っている。ロッカー式の納骨堂は、扉の付いた小さな四角の箱――納骨壇というそうだ――が、ずらりと並んでいる。天井近くの納骨壇は、どうやってお参りするのだろうかと、他人事ながら心配になった。
「あった、あった。ここだ」と父が祖父の納骨壇を見つけて、その小さな扉を開ける。一人ずつ順番に納骨壇の正面に立ち、手を合わせた。今日から祖母がここに入り、将来的には父と母も入ることになる。「亜沙子も入れるからな」と、父が言った。「あ、そういうことか」と思わず声に出た。自分は親に心配されている。自分こそが扱いづらく、気をつかわせる存在なのだ。誰も言ってくれないし、兄のことばかり問題視していたから、ちっとも気がつかなかった。
葬儀会館に戻ると、ロビーの片隅でひそひそ話していた係員の一人が近寄ってきて、申し訳ございません、お連れのワンちゃんが……と言いにくそうに切り出した。ワンちゃん？　親戚たちが互いに顔を見合わせる中、「すみませんです」と頭を下げたのは祖母の妹だった。葬儀会館に預ける荷物の中に、飼い犬を入れたキャリーバッグがあったらしい。
「叔母さん、犬を連れてきたんですか」
めったに感情を表に出さない父も驚いている。
「家にこの子だけ置いていくわけにもいかないし、かといってペットホテルはかわいそうだし」
小柄な祖母の妹が、ますます縮こまって答えた。

「昨日、ホテルに泊まるときはどうしたんですか」
「キャリーバッグを大きな紙袋に入れて、外から犬が見えないようにして、ホテルにこっそり持ち込んで。小型犬なもんで、バレずにすみました、ハイ」
ハイ、じゃないよ、全く。
反射的に顔を上げると、父と母が呆気に取られた顔で同じ方向を見ていた。つられて亜沙子も兄を見た。
あの、どういたしましょう、という係員の声で我に返った。
「ご迷惑をおかけして申し訳ありません。すぐ引き取ります」
父が係員と共に荷物あずかり所に向かい、まもなく犬用のキャリーバッグを抱えて戻ってきた。祖母の妹がバッグのファスナーを開けると、白いチワワが勢いよく飛び出して飼い主の腕の中にダイブした。「ああ、マリリンちゃん」と祖母の妹が泣き出さんばかりに抱きしめる。
「きれいな毛並みのワンちゃんねぇ」と母が感嘆の声を漏らせば、「ロングコートチワワ」と低い声が応じる。兄だ。またしゃべった。「え、あ、そうなの」母の声がうわずり、一瞬、歓喜の表情になりかけたが、すぐさま思い直したようだった。
愛犬を納骨堂に連れて入っていいかと祖母の妹が係員にたずねている間に、兄がチワワを抱き取っていた。チワワが大きな瞳で不思議そうに兄を見上げる。床に置かれたキャリーバッグからリードがはみ出していた。バッグの中に犬と一緒に入れるなんて危険だ。犬の首に巻きつくと窒息事故につながる。
兄はリードを引っぱり出すと、チワワの首輪に手際よくつなげた。
「散歩してくる」
ぼそりとつぶやき、チワワを片腕に抱えて表に向かう。亜沙子たちは呆然と見送った。あれまあ、散歩に行ってくれるなら、これも、これも、と祖母の妹があたふたとキャリーバッグのポケットを漁り、ビニール袋やら水の入ったペットボトルやらを取り出し、一番近くにいた亜沙子に押しつけた。あ、あ、亜沙子ちゃん、これ持って行って。おやつも入ってるから。クッキーは二つまでね。食べ過ぎるとおなか壊すから。
ここに弟がいたら迷いなく任せるところだが、妻と子どもらのことが気になるとかで、とっくに帰ったあとだった。
重い足取りで玄関を出る。電柱におしっこをかけているチワワに近づきながら、「あれ、この子……」と亜沙子が言いかけると、「オスだな、これは」と兄が応じた。あまりにも久しぶりの会話に、声を発するタイミングを逸してしまった。代わりに大げさなくらい何度もうなずき、ちゃんと聞いているという意思表示をした。
この二日間、キャリーバッグに閉じ込められていたせいか、マリリンは興奮ぎみでゴムまりのように飛び跳ねた。歩道脇の植え込みに頭から突っ込み、鼻をひくつかせては土を掘り返し、すれ違う通行人を気まぐれに追いかけ、ちっとも前に進まない。昔、実家で飼っていた柴犬のロンとはずいぶん違う。ロンだったら飼い主の制止も虚しく、リードをぐいぐい引っ張って一直線に前進するだろう。口を半開きにして舌を垂らしながら、前へ、前へ。

歩道の先に桜の大木が現れた。木の根元がでこぼこと盛り上がっているところを、マリリンが障害物競走のように軽快に飛び移る。兄は桜の木を見上げたまま動かなくなった。つられて亜沙子も上を見た。見事な葉桜だ。今にも毛虫が落っこちてきそうではあったが。

「マリリン、そろそろ帰ろっか」

しゃがみ込んで犬に向かって話しかけると、頭上から声がした。

「桜」

え、と顔を上げると、兄が木を見上げたまま言った。

「ロンが初めて来た日。桜が満開だった」

「……そう言えば」

実際のところ記憶にないが、話を合わせた。兄のしゃべる気が失せないように。

「あのとき天才だと思った、俺の妹は」

「はい？」

「〝犬は指を差したその先を見ることはできない〟」

「ああ、そう言えば」

今度は本心からうなずいた。遠い日の記憶と共に、桜吹雪の舞い散る公園が目の前に現れた。

ロンが我が家にやって来たのは亜沙子が十歳のころだった。子犬だったロンを兄が抱っこして、亜沙子も一緒に初めての散歩に出た。ロンに桜を見せてやろうと言ったのは兄だった。桜並木が美しい近所の公園に行き、兄はロンをそっと地面に下ろした。ロンは地面をくんくん嗅ぎ回る。兄が、ついさっき自分が名付けた犬の名前を呼ぶ。ロン、上を見るんだよ、ほら、桜だよ、こんなにきれいなのに、ロン！　ロンが兄の方を向いた。兄は片腕をめいっぱい伸ばして指差し、ほら、ほら、と叫び続ける。ロンが兄の顔を見る。兄は腕をぶんぶん振り回し、手のひらを開いたり閉じたりした。ロンが兄の手を見る。ロン、違う、指の先を見るんだよ、僕の指の先を。亜沙子はこらえきれずに笑いだした。お兄ちゃん、お兄ちゃん、指差したその先を見るなんて、そんな高度なこと、犬にできるわけない。人間じゃないんだから。

あのときの兄とロンのきょとんとした顔！

「あったね、そんなこと」

「今なら、どうかな」

兄はその場にしゃがみ込み、リードを持っていない方の手を高く上げて桜を指差した。

「マリリン、ほら、桜。……葉桜だけど」

そのとき、マリリンの動きがぴたりと止まり、兄の指差す先を見た。

「おお、犬の進化！」

兄が勢いよく振り返った。「今の、見た？」

見た、と答えようとして喉がひきつった。亜沙子はしゃがんだまま膝に額を押し付けて、どうにか笑いをこらえた。マリリンは鳥の鳴き声に反応したのだ。そのとき見上げた方向が、たまたま兄の指差す方向と同じだったにすぎない。

「なんだ、見てなかったのか。決定的瞬間だったのに」
心底がっかりしたような口調だった。
「もう一回、やって見せるから、今度はちゃんと見ててくれよ」
犬の名前を連呼しながら、兄が頭上の桜を指差す。マリリンは名前を呼ばれるたびに何とも愛らしいしぐさで首を傾げた。マリリン、上、上、俺を見るんじゃなくて、ほら、さっき出来ただろ、ちがーう！　亜沙子はついに声をあげて笑い出した。道路に手をついて、倒れないよう体を支えなければならなかった。通行人が怪訝な顔で通り過ぎていく。脇腹が痛い。
こんなに笑ったのは久しぶりだった。

〈了〉

〈原稿用紙換算　四十二枚〉